

誰もが平等な世界を望んだ俺達は、ポラリスの許から元の世界に帰るなり難題に直面する事となった。

「きみ……何で、生きて……」

「随分な言い様だな。今際の際には可愛らしく泣いていたくせに」

「泣いて、って、だってあれは……」

「きみぐらひは喜んでくれるかと思っただが、残念だ」

そんなふうに着て俺を見つめ、ヤマトはゆっくりと笑んだ。

喜ぶとか悲しむなんて感情は湧いてこなかった。一刻を争う事態の中で彼の死はもう自分の中で割りきるしかないと思っただけだから、思いがけず生きて動いている彼を前にしてどうしたらいいのか解らないまま何も言葉は出てこなかった。そんな俺の隣でロナウド達は険しい顔をしている。

「ヤマト」

彼の名を呼んだ瞬間に世界が動きだした気がする。忘れていた疲労が俺の足をふらつかせた。倒れこむように彼に縋りつくと温かくしつかりとした腕に抱きとめられ……そのまま彼は俺ごとその場に尻餅をついた。

「ごめん、大丈夫？」

「……どうにか生きのびたとはいえ私もきみ達と同じかそれ以上に疲弊している。どうする？ 殺すなら今のう

ちだぞ」

背後の気配が危うさを増すのが感じられた。

「馬鹿……挑発するな……」

倒れこんで乗ったままなので相手の表情は見えない。だがしっかりと自分を支えるヤマトの腕はちゃんと生きているものの体温と厚みを持ち、俺を安心させるみたいに軽く揺らしてきた。そんなふうに来るヤマトともう一度殺しあうとか、許さないというふうには俺にはどうしても思えないのだった。

わけが解らず呆然としていたのは皆も同じだった。そんな俺達にヤマトは淡々と何が起こって自分が生き返ったのかという仮説を話してくれた。

ヤマトはあの時確かに死んだ。しかし魂はまだその体内に留まっていたのだという。

「お前は富士の龍脈を活性化させてポラリスの許へ辿りついた。日本の中心の龍脈をそのように活性化させた事でおそらく残された都市の龍脈も一時的に力を取り戻したのだろう。私がタワーと接触した形で死んでいたのも幸いした」

お前達にとっては不運かもしれないがな、と彼は座ったまま皮肉げに笑って周囲を見回した。

「世界が変わる瞬間を私も感じた。そして感じた事を不思議に思い目を開けた。あれだけの傷が殆ど癒えていた

のは龍脈の力故だ。そういう意味ではお前達が私を生き返らせたのだとも言えるな」

そう言って立ちあがったヤマトの視線は、まだ座りこんで動けない俺に向けられた時にほんの少しだけ和らいだようにも見えた。

「多分局長の言うとおりでだね。この状況だとそれ以外の仮説はちよつと思いつかない。そっか、つまりアタシらが局長を復活させちゃったんだ」

どこか面白そうにフミが言った。

「ちよつとどーすんの、ロナウド」

ジョーの間延びした声は一同の緊張をほぐすようだった。彼もそれを狙ってわざと大きな声を出したのかも知れない。

「……どうするも何も、生き返ってしまった者をどうしようもあるまい。こんな世界だ。これ以上の流血は避けたい」

周囲を見渡しながら言ったロナウドの声は重い。辺りは未だ破壊の爪痕を濃く残し、人々は傷つき疲弊しているのだから。けれどロナウドのその決断は彼についてきた者達の心を明るくしたようだった。この世界に生きている者をもう殺したくない。そう言えるロナウドで良かったと俺も思う。

「だが何もしないというわけにはいかないだろう。暫く

の間峰津院には監視をつけるべきだと思う。出来れば一日中すぐ近くにいられるのが望ましいが」

「あつ、じゃ俺と一緒にいようか？」

自然にそんな声が出ていた。

「きみか。しかし……」

「ロナウドがずつといるのは無理だし、事情を知らない人に任せるわけにもいかないだろう？」

ヤマトが小さくため息をつく。

「二十四時間張りつかれるわけか。鬱陶しいのはごめんだが、彼なら譲歩しよう」

「……まあしょうがないんじゃない？ だつて他に引き受けてくれる人なんていないでしょ」

ジョーがそう言って仲間達を見遣った。

以前ヤマトについた元実力主義の面々のうち、マコトはずつとヤマトに申し訳なさそうな視線を向けていて監視なんかさせたら彼女の胃に穴が開きそうだ。フミとケイタは特に興味もなさそうだった。それぞれこれからの事で頭がいっぱいらしく頼んでも引き受けてくれそうにない。

俺達のリーダーとしてやる事が多いロナウドは論外として、他の人達もそれぞれ担うべき役目を抱えている。この先時間や仕事の融通が利くのは学生の俺達なのだろうが、二十四時間寝る時も一緒に過ごせというなら女の